

第12回優秀論文賞選考理由

優秀論文賞選考委員会 大橋英夫

ガンディーの平和的手段による抗議形態は、しばしば闘争的非暴力と認識されてきた。しかしグジャラーティー語で再読すると、彼のセクシュアリティ認識における問題構成が見落とされていることが判明する。このような問題意識から、本論文は自己認識の変革に必要な私的レベルにおける宗教実践、すなわち「ブラフマチャルヤ」にみられる彼の思想的変遷を手掛かりとして、そのセクシュアリティ認識の変容を取り上げ、それが闘争性、男性性に根差す同時代のナショナリストたちの解放の言説と根本的に異なっており、非暴力ナショナリズムの思想的基盤となっていたことを実証しようとするものである。

本論文は、これまで解明が求められつつも、なかなか着手できなかった問題に真正面から取り組んでおり、ユニークなテーマ設定からも明らかなように、きわめてオリジナリティの高い論文として評価できる。分析の視角に斬新性がみられるだけでなく、一貫した論理構成を描き出しており、また手法としてもグジャラーティー語の一次文献に当たって丁寧に論証がなされるなど、論文としての完成度も高い論考となっている。もっとも、本論のポイントである晩年の実験にいたる変化の分析、また晩年の実験と植民地主義的な二元論の克服との関連の説明について、より緻密な考察が必要であるとの評価が選考過程で指摘されたことも付記しておきたい。

このような指摘にもかかわらず、近年のインド研究において丹念な資料分析に基づく論文が減少傾向にあるなか、本論文には新たな可能性を感じさせるものがあり、本賞の授与は同分野の若手研究者への励みになるものとする。

受賞の言葉

一橋大学大学院 間 永次郎

この度は、歴史あるアジア政経学会から第12回優秀論文賞という望外の栄誉を頂けることを、驚きと共に、大変光栄に思っております。

拙稿は、博士課程の最初の約三年間でインドで収集した一次史料を土台に、2012～2013年の米国留学中に、コロンビア大学大学院哲学部で、心の哲学とMoral Psychology of Politicsを学ぶ中で執筆したものです。小生の研究課題は、ガンディーが37歳の時から開始した、「ブラフマチャルヤ」(性的禁欲主義)という身体的・心理的実験が、彼の政治思想が醸成されていく上で、どのような影響を及ぼしていたかを明らかにするというものです。精神分析の方法から影響を受けた一部の研究を除いて、これまで、ガンディーについて扱った社会学者の研究では、その政治行動・思想の分析の中で、ガンディーのセクシュアリティ認識という身体的・心理的問題が関わるこのブラフマチャルヤの実験の意義は、ことごとく見落とされてきました。ガンディーのセクシュアリティ認識に着目した数少ない研究の一つである精神分析家のE・H・エリクソンによる研究では、ガンディー思想の中心にある「サッティヤグラハ」という概念が、「闘争的非暴力」と名付けられ、その特徴が、果敢な自己抑制を行うクシャトリア的マスキュリニティとの関係で論じられました。エリクソンの解釈は、ガンディー研究者の枠を越えて、インド国内外におけるその後のガンディー理解に甚大な影響を与えました。拙稿では、エリクソンを始めとしたガンディーのブラフマチャルヤに関する先行研究に見られる史的・方法論的限界を指摘し、先行研究でほとんど扱われてこなかったグジャラーティー語の一次史料を用いて、ガンディー晩年(1946-1948)のナショナリズム思想とブラフマチャルヤ思想との関係を、同時代のナショナリストたちの間に流布していた男女のジェンダー枠組みを越えた、ガンディー独自の超ジェンダー的「自己」概念とでも言えるものに着目しながら、明らかにすることに努めました。

拙稿執筆後も、同時期の思想分析を続けております。その中で、ガンディーにおいては、公領域における政治的主張、セクシュアリティに関する私的宗教実験、宗教的とも政治的ともつかない断食行動といったものが、すべて同時的に行われており、こうした包括的な「宗教政治」思想とでも言えるものを一つの研究論文で十分に説明するのは、極めて困難で、拙稿が、ガンディー晩年の宗教政治思想の一側面に光を当てたものにすぎないことを強く自覚しております。現在は、この拙稿の問題点、また、拙稿とほぼ同時期に出版された海外の新しい研究動向も取り入れた、新しい英語論文の執筆に取り組んでおります。

最後になりましたが、これまで小生の研究を、辛抱強く支えて下さった先生方に、深い感謝の意を表したいと思っております。今後とも、ご指導・ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。